

南北問題の学際的研究

勝 俣 誠

2010 年度は前年度からの現代経済学思想潮流も視野において数回の研究会と国際会議参加および現地調査を実施した。

《概要》

2010 年 7 月 研究会

報告者：Serge Latouche (PARIS 大学名誉教授)

「脱成長と現代社会」

2010 年 12 月 2-6 日ブルキナファッソ

「アフリカ独立 50 年を考える」

L'Association les Amis Le Monde Diplomatique 主催

於：ワガデュグ市労組会館

グローバル資本主義化のアフリカ経済分析

現地調査・ヒアリング 食料主権と脱開発

2011 年 3 月 2 日 研究会

報告者：竹内 啓 (明治学院大学 IISM 客員研究員)

「偶然とは何か—社会科学におけるその意味」

2011 年 3 月 23 日 研究会 アジアから見た南北問題の現状報告

報告者：宮田春夫 (新潟大学国際交流センター)

「アジアの開発と環境について」

重田康博 (宇都宮大学国際学部)

「アジアの民衆経済—スリランカのサルボダヤ運動について」

音喜多かおる

「アジアのジェンダーと雇用問題」

《内容報告》

2010 年 7 月 6 日 公開研究会 9 号館 911 教室

Serge Latouche

1940 年 1 月 12 日 ヴァンヌ生まれ。経済学者、哲学者。パリ第 11 大学ジャン・モネ学部 (法学、経済学および経営学部) 名誉教授。「良心的経済成長拒否者」であり、雑誌

『Entropia』（脱成長に関する理論的・政治的研究誌）友の会会長。また、雑誌『La Revue du MAUSS』の有力な寄稿者のひとり。

サン＝ジュストが言ったように幸福とはフランス革命直前に生まれたヨーロッパでは新しい概念であるとしたら、それは宗教的な法悦や公共の安寧とは違って物質的かつ個人的な充足であり、経済学者が言うところの 1 人当たり GDP の前段階である。成長社会と近代性は「最大限の人々に最大限の幸せを」という目標を同じくしているが、その見込みは狂いつつある。新経済財団（New Economics Foundation）が行った地球幸福度指数（Happy Planet Index）が明らかにしたように消費は縮小して幸福感を生まず、おまけにエコロジー破綻は目に見えている。それゆえ、需要を制限する昔ながらの知恵に立ち戻り、許容し得る未来を構築するため、つましさの中に豊かさを見出すことが必要である。それが脱成長の道である。

なお、この研究会に関しては次の書籍が刊行されている。

『脱成長の道一分かち合いの社会を創る』 勝俣誠、マルク・アンベール編著 コモンズ 2011年5月

2011年3月2日研究会

演題：「偶然とは何か—社会科学におけるその意味」

『偶然とは何か？』（岩波新書、2010年）

報告者：竹内 啓

参加者：勝俣 誠、柴田 有、涌井英之、井上泰夫、中野佳裕

岩波新書を昨年刊行した。どうしてこの本を書いたのか。国際学部で日本経済論を担当。元々は東京大学の経済学部で統計学を専攻した。数理統計学。最初はマルクス経済学の鈴木鴻一郎先生のところで勉強した。はじめから近代経済学の市場経済主義に違和感を持っていた。確率的なモデルを使って経済分析をするので、その背景にある科学の論理に興味があった。30年近く前に東京大学教養講座で行った。偶然と必然の問題について取り組んだ。『偶然と必然』（東京大学出版会、1982年）として出版された。その後、長い間いろいろ考えたことを『偶然とは何か』（岩波新書、2010年）として出した。

日本語で「偶然」と「必然」は対になっているが、英語では対になっていない。「偶然」をどう考えるかは、「必然」をどう考えるか、「必然」の否定として現れる。昔、九鬼周造が偶然性について執筆した。ただし、私が書いた本は哲学を論ずることではない。

世の中には本質論というのがある。「彼が悪いことをしたのは、もともと悪い人間だから。良いことをするのは偶然だ。」という考え方を止めよう、という前提に立つ。つまり本質論を論じることを棚上げにする。因果論的必然についてのみ考える。

因果論的必然に考えることの端緒には、近代科学、とくにニュートン力学がある。ニュートン力学は偶然性を排除する。ニュートン力学における因果論は、神学にみられる目的論とは異なる。普通の科学的な意味での因果論のみをあつかう。

ラプラスの考え。偶然と確率論。通説によれば、「ラプラスは、人間の知識が限定されているから偶然という概念が出てくる、と述べた」と解釈される。しかし、彼が言っている完璧な知性とは神様のこと。神様のみが決定論。そして、「たしからしさ」を考えるために確率論を導入した。

確率的に扱う現象は、偶然現象のモデルとして扱う。サイコロの例。正しいサイコロを振っていけば、1の目が出てくる確率は $1/6$ である。何回も降っていけば、 $1/6$ に近づく。

確率論の論争には、どれが正しい確率概念か、ということ巡って三つくらい論争がる。しかし、私の意見によれば、抽象概念としては「たしからしさ」が確率概念の定義。それを現実の現象に結びつける際に、様々な論が生じる。

客観確率と主観確率の例。保険に入る者の例。家が火事になる確率。家が焼けたらおしまい、家が焼けない場合は保険料の支払い損。主観確率はこういう考え方。主観確率が客観確率と同じになる必要はない。

20世紀的な議論では、大数法則が中心。イアン・ハッキングが、「偶然を飼い慣らす」と表現で行われている。しかし「偶然を飼い慣らす」という考え方だけではない。大数法則だけではない。学生の頃、「偶然と必然の弁証法」という話があった。同じ偶然が何度も起こると必然になる、という考え方。私は嘘だと思う。偶然が積み重なると、また新しい偶然が起こる。どんどん違う方向へ行く。それが、生物の進化について考えると起こる。

ニュートン力学は、ある一点から別の一点までの因果法則を理解すると、それ以外のことは起こらない、という考え方。これでは新しいことは起こらない。100%予定説。ところが、生物には、新しい生物が生まれるということが起こる。ダーウィンは、生物進化を説明した。ところが19世紀の進化論は教会とかなり議論した。進化論は創造説を否定するので、教会と議論になった。ところが進化に於ける偶然の役割について、難しい議論がある。偶然を大数的に考えるのならば、生物の進化は考えられない。

他方で、19世紀には「進歩」という考えがある。ところがニュートン力学には進歩という考えがない。「進化」と「進歩」は同じである、という考えが19世紀にあったが、それはダーウィンの考えではない。進化は、新しい環境への適合であるので、新しい形態が前の段階よりも退化することがある。これが進化には退化の可能性も含まれる。この理屈をどう説明するのか？

遺伝子生物学の発展がこの問いに答えるのに役立つ。上の遺伝子は残りの遺伝子をコントロールする役割をもっており、それがひとつでも変わると進化が起こる。

「歴史における進歩は必然だ」という考え方は、マルクス主義の教条になっている。マルクスもエンゲルスも、進化と進歩を同一視した点で問題がある。マルクス主義の中には偶然が入ってこない。これはマルクス／エンゲルスがダーウィンを誤解したものではないか？

要するに、私の意見は、偶然が起こらなければあたらしいものは生まれえない。例えば或る人物の個性は、歴史的必然性とは関係ない。

例えば第一次世界大戦後にロシア革命が起こった。ロシア革命は20世紀を規定する大きな革命であったが、レーニンがいなかったら起こりえなかったろう。レーニンがいなかったボルシェヴィズムとインテリ革命主義が結びつくことはなかったろう。マルクスの考え方では、生産力が

発展したあとに共産主義が興るはずだった。しかし、ロシア革命ではそうではなかった。だから、無理が重なる必然が出てきた。スターリンが登場するなど。だから、今から思えばよくソ連が70年も維持されたと思われる。しかし、ロシア革命の最初は、相当偶然的なものであったと考えられる。人々が「社会主義をつくろう」と意志をもって創ったわけではない。

運、不運は、人間が主体的に対応しなければならない。社会において起こる運、不運は、運が良かった人が不運を被った人を助ける必要がある。不運の分配が必要。これが福祉政策の根本的な考え方。自由主義経済政策は、何でも自己責任に帰趨させるところが問題。

偶然を考えることができるのは人間のみ。なぜなら「そうであるかもしれない」ということを考えられるから、偶然というものが起こる。偶然は想像の世界と関わる。

近代社会に入り、人間が頭数で数えられるからこそ、偶然という考えが出てきた。統計学が出てきて、大数法則の時代が到来した。大量（mass）という考えが現れることで、統計学による管理が現れる。その後、大量技術の時代になる。フォーディズムがその典型。このとき問題となるのが、品質にばらつきがでてくること。統計的な品質管理の考えが出てくる。しかし現在は量から質の時代へ移行している。この場合、確率論が出てくる。

そのほか、大数法則的でない偶然が出てくる。芸術や文学に於ける偶然の問題。偶然を積極的に捉える必要がある。

まとめると、世の中には大数法則的でない偶然がたくさんある。そういった様々な偶然について考えるべき。

*

勝俣：社会科学をやっていると、どうしても「進歩」という考えにとられる。開発や経済成長がそう。大数の法則とは異なる論理で社会をみる必要がある。

竹内：社会でもっと重要なことは、人々が本当に望みたい方向に社会が進むこと。ブータンの問題は、王様が情報を遮断し、すべて自分で決めること。生物に於ける変化というのは突然変異ともいえるが、社会変革において、「人民が歴史の主体だ」と最初から決めつけるのはよくない。

柴田：私はこれまで偶然について余り考えていなかったのですが、今日は非常に幸福であります。最初に因果律があった、その後、偶然が出てきたという話がでてきた。たとえば、あるおばさんが片足で立とうとしたら転んだ。この場合、何が原因かわからない。無限の説明の仕方がある。現代医学でも、アトピーなんかは、原因を問わない。原因が複雑するから。偶然は世界にもいろいろ存在する、ということがある。しかし、社会で責任を問われるのは原因の方。偶然にも倫理的問題が孕む。

竹内：たとえば、自動車事故では加害者が責任をもつが、被害者の方も、その場に偶々いたということで、責任もある。ということで、運が悪いということも、責任がある。ここで、不

運の分配という意味での社会政策が必要。どちらかに 100%責任がある、ということではない。不運が起こった、という結果から考えなければならない。

柴田：原始キリスト教は、運、不運に関係なく貧困救済の対象であったので、貧困が存在しなかった。そういう考え方と関連するのではないか。

竹内：そうだと思います。その人に働く意志があるかどうか、とは関係なく、結果として貧困である、ということから、貧困対策を行わなければならない。貧困問題を自己責任論に還元してはならない。

中野：結果を重視するという点は、アマルティア・センのケーパビリティ理論にも通じる話だと思います。質問ですが、お話の中で、自然現象における偶然と社会現象における偶然の区別がされていなかったような気がしますが、どうしてでしょうか。例えばミシェル・フーコーなどは、統計学の合理性が社会化する際に権力の役割を重視しますが。

竹内：問題意識はよくわかります。ここで論じているのはあくまで科学の範疇に収まるものであって、フーコーのように思想や権力を扱うものは扱っていません。

井上：現代経済学では必然性を中心に物事を考える。若い経済学者は、専門学術雑誌へ論文を投稿することのみでキャリアを築こうとする。そこでは、難解な数理モデルで経済現象を説明しようとする。金融工学はひとつの決定論で、2008年の金融危機以前までは、大多数の経済学者が金融工学をもてはやしていた。しかし2008年以後は、金融工学をみんなたたくようになった。

竹内：金融工学は、数理モデルの前提の仮説が間違っていると思う。

勝俣：われわれは偶然を排除して必然性の領域を高めようとしているのではないか、と思いました。三木清の「パスカルの賭けについて」を読んだ。パスカルは、「賭けはしなければならない。賭けをしなければならない不安こそ、わたしたちが生きていることなのだ。神を信じる方がよいのだ」という考え方がある。そもそも不安があるから、それを埋めようとするのが人間なのだ。

竹内：そう。不安を埋めるのが想像力。

中野：三木清みたいに実存主義では、「偶然を実存的に経験する」という考え方ですが、今日竹内先生が話された「偶然」は、経験科学に於ける認知能力における偶然だと思います。両者の区別について説明して頂きたいのですが。

竹内：その通り。経験科学の問題しか扱っていない。実存主義的な偶然については扱っていないが、その問題についても「科学的必然性だけで説明するのは間違いだ」ということを暗示的に述べたい。ところで、だからといって、ポストモダンに関しては懐疑的だ。合理性が普遍的でないからといって、何でも主観的になるわけではないと思う。

勝俣：まさにポストモダン思想が時代と地域の歴史的な文脈を無視して語られてしまうと、そこで疑問に思うのは、社会科学の分析枠組に必要な「進歩」とか、そういうメタナラティブについて語れなくなるところ。大文字の歴史についても語れなくなる。僕はアフリカについて研究しているが、アフリカ社会には人為的な社会改良（たとえば、万人に社会的公共サービスを提供する）という意味での開発が必要だと思う。この「南」のなかの「南」での脱成長についてはまだ議論の準備が出てきていない。

竹内：歴史をすべてナラティブとして扱うのは問題だと思う。

涌井：第二次世界大戦後、世界経済はずっと成長してきたが、2000年代に入って初めて0%やマイナス成長になった。これが世界初の現象。これをどのようにとらえるべきか。

竹内：世界経済を分析するには、車が売れなくなった途端に大量の失業が出る、というシステムの論理そのものを分析した方がよい。世界的には0%でよい。

※本報告書は、国際学部附属研究所共同研究「南北問題の学際的研究」の中間報告書である。